

「品川宿ウォーク」と「池上本門寺と池上梅園散策」

当番幹事代 川股賢三

第52回の当番幹事は榎本哲夫さんですが、彼の都合が悪く、サークルの代表の六角 学さんから今年の幹事グループでカバーして欲しいとの要請で私が代行しました。

当初は池波正太郎の「鬼平犯科帳の本門寺暮雪」の舞台になっている池上本門寺(1282年に日蓮聖人の入滅地)と西隣の池上梅園を散策するのんびりした3Kmのコースを設定したが、このコースではあまりにも歩行距離が短過ぎるので品川宿の八っ山口から鈴が森刑場跡までの旧東海道(江戸時代のまま道幅6間(10.9m)で距離約一里(3.8km))を加え、街道周辺の名所・旧跡を探索する計画とした。

※1里は36町、1町は60間、1間は6尺、1尺は10寸です。1寸は3.0303cm。結果1里は3927.2mです。

品川宿は「旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会」が中心となって石畳をつなぐ・街並みをつなぐ・灯りをつなぐ・まちのサイン(案内マップ、石柱、歴史案内ボードなど)、松をつなぐ(東海道の宿場の松並木の移植事業)などの事業を行っており、その結果、街道通りとその周辺に多くの旧跡が掘り起こされている上に新しい名所を造り出している。これらの名所・旧跡をすべて探索すると約10Kmコースとなった。

ハイキングクラブを構成する会員23名(80歳代2名、70歳代17名、60歳代4名)の年齢を考慮に入れ、高齢者に意見を聞くと5Km程度にして欲しいとのこと。そこで1月からスタートした多摩支部の東海道ウォークの資料を提供いただいて、再検討をして旧東海道は八っ山口から南品川宿まで散策とし、後は都バスと東急バスを乗りついで池上へ移動するコースとした。

2月23日(日)曇りのち晴れ、JR品川駅高輪口に10時30分にゲスト7名を含めた21名が集合し、品川宿ウォークをスタートする。

品川駅は東京マラソンと京浜東北線(蒲田・鶴見間が不通)折り返し運転の影響で大混雑、明星さんは蒲田・鶴見間が不通で迂回して集合時刻にギリギリ間に合いました。

早々に品川駅高輪口から600m先の旧東海道八っ山口に向かう、**入口手前広場の案内看板**を使って品川宿の名所旧跡めぐりのコースを確認する。なお、旧東海道の交通規制は車両南行き一方通行で、常に車は後方から来るのみ、背中に目が欲しい道路であることを案内する。

京急の踏切を渡ると直ぐの海側に**一番石柱(東海道八っ山口)**がある。八っ山口から200m歩くと海側に北品川動物病院ある。手前角地に**問答河岸の碑**が見られる。問答河岸の碑は3代将軍徳川家光が東海寺に入るとき、沢庵和尚が迎え出て問答(**将軍「海近くして東(遠)海寺とはこれ如何に」**和尚**「大軍を率いても将(小)軍と言うが如し」**)をした故事にちなんで造られた。

問答河岸の碑の50m先の海側のフレックスティンとロイヤルガーデン品川の間に**三番石柱(歩行新宿と土蔵相模跡)**あり、土蔵相模(**文久2年(1862)12月12日夜、高杉晋作、井上馨、伊藤博文ら長州藩の志士が御殿山に建設中の英国公使館を焼き払った際には集結地となった。**)の説明ボードはコンビニを通り過ぎたマンションの入り口のところにあります。

四軒隣のさわやか信用金庫品川支店が**稲葉(因幡)屋跡地**です。稲葉(因幡)屋は手引き茶屋で、土蔵相模などの食売旅籠(妓楼)には手引き茶屋からあがるのが常で、桜田門外の変前に土蔵相模で酒宴を開いた水戸浪士達も稲葉屋から土蔵相模にあがったという。酒宴の後、稲葉屋に戻った水戸浪士達は、ここで計画を練り、翌日の襲撃に備えた。との説明がされていた。手引き茶屋は他に一力(跡地は高城ビル)・島崎楼(跡地は大沢ビル)などがこの周辺にあったようです。

さわやか信用金庫品川支店から左側に曲がり300m先の**利田(かただ)神社の鯨塚**へ、途中八っ山通りを越えたところに漁船の舟泊まりがあり、この掘割は安永3年(1774年)から天保5年(1834年)にかけて、南品川宿名主利田吉左衛門により目黒川の砂洲を埋め立てて利田新地が開発された時に作られたもの。利田神社は寛永3年(1626年)に、東海寺の沢庵が弁財天を勧請したのが始まりとされます。後に現在地に移された。

品川区教育委員会の資料によると、鯨塚は寛政10年(1798年)5月1日、前日からの暴風雨で品川沖に迷い込んだところを品川浦の漁師達によって捕えられた鯨の供養碑である。

鯨の体長は九間一尺(約16.5m)高さ六尺八寸(約2m)の大鯨で、江戸中の評判となった。ついに十一代将軍家斉(いえなり)が浜御殿(現、浜離宮恩賜庭園)で上覧するという騒ぎになった。全国で多くの鯨の墓(塚・塔・碑

などが散在するが、東京に現存する唯一の鯨碑(鯨塚)である。

利田(かただ)神社を出て左側へ80m進むと台場小学校があり、台場小学校前に**御殿山下砲台の石垣と第二台場にあった灯台のレプリカ**が展示してある。

台場は嘉永6年(1853年)6月にペリーが浦賀に来航し、翌年春の再来航に備えて江戸前の防衛のために海の中に11基の台場を設ける計画し、1番から7番までのを着工する。4番と7番が未完成で五つの台場が完成した時点で日米和親条約が結ばれた。

6基の台場が遅れる為に代替えとして沿岸部に砲台を構築することが決まり、利田新田の沿岸部を御殿山の土で埋め立てて御殿山下砲台を作った。この間、泉岳寺から品川宿の東海道は封鎖され、西方の二本榎通りを使って仮往還道が設置された。

八ッ山通りに戻り、横断歩道を越えて台場小学校前から180mで旧東海道の山側にある**善福寺**に戻る。この寺は時宗寺院で、音響山伝相院と号します。本尊は阿弥陀如来です。この善福寺は1294年に第二世他阿真教が開闢した寺、漆喰を「左官こて」で立体的な飾りを施した「こて絵」の寺としても有名(本堂正面入口の上から壁面にかけて「伊豆長八」が作った漆喰鏝絵の龍がある。)である。

善福寺から南へ80m進むと品海公園の手前の山側に四番石柱(新宿お休み処)があり、海側の品海公園には**品川宿の松と番外石柱 品川宿(江戸より二里・川崎宿へ二里半)**ある。

品海公園を90m南下するとクリーニング店の横に法禅寺へ向かう路地がある。この寺は浄土宗寺院で、臨海山遍照院と号します。本尊は阿弥陀坐像です。

明徳元年(1390年)に言譽定賢が創建したと伝えられ、増上寺の末寺でした。幕末の品川台場築造の際に品川御殿山から出土した中世の板碑121基を保存しており、その由来を記した遺墳碑が建てられている。また、境内には天保の飢饉で亡くなった人の供養塔「流民叢塚碑」があるほか、樹齢約400年と言われるイチヨウの巨樹がある。さらに、門の前には「品川小学校発祥之地」の碑があり、寺は数々の歴史を刻んでいる。

法禅寺の路地を戻り、南へ90m先に商家造りの建物が山側に見える。この建物は慶応元年創業の**下駄の丸屋**で、これまでも数多くテレビで紹介された店舗である。残念ながら日曜日で店舗は休み。

丸屋前を通り抜けて30m先の海側に**一心寺**があります。この寺は真言宗智山派寺院で、豊盛山延命院と号し、本尊は不動明王です。一心寺は安政2年(1854年)、彦根藩16代藩主井伊直弼の開基となるお寺。井伊直弼は一心寺建立にあたり、『日本鎮護、開国条約、宿場町民の繁栄安泰』を祈念したという。

一心寺前の道路を跨いだ所に**五番石柱(虚空蔵尊横丁・本宿)**ある。この石柱を目印にして虚空蔵尊横丁へと歩む。この道は江戸時代からの路地で今も残されている。**虚空蔵尊が祭られている養願寺**(小さな寺)まで路地は続き、左に曲がると大通りに出る路地かもう一本ある。路地の出口に**六番石柱(虚空蔵尊横丁・北馬場)**あり、この路地は7のつく日が縁日で、特に4月と11月は春秋の大祭で露店が数多く出店し、多くの人々を集めている。養願寺は天台宗寺院で明鏡山善行院と号します。正安元年(1299年)に創建、什慶が寛文年中(1661〜1672年)に中興開山したといひます。本尊は阿弥陀立像です。別の資料では虚空蔵菩薩とされている。

※虚空蔵菩薩は、知恵・福德・音声を広大無辺に授けるといふ。虚空蔵尊は「十三参り」と結びつて、子供が13歳より15歳までにお参りすると、福・徳・智慧が授かると言われ、また、丑年・寅年生まれの守り本尊としても知られている。

我々は虚空蔵尊横丁からレンガ壁越しの**真宗正徳寺の紅梅**を眺めながら大通りに出ましたが、田代さんは**レンガ壁の積み方が土台がイギリス積み・上部がフランス積み**なのを見つけて、後で教えてくれました。

大通りに出て右に曲がり、京急電鉄のガード下をくぐり、第一京浜の北品川三丁目の信号で横断歩道を渡ると右側に品川神社がある。

品川神社は後鳥羽天皇の御世、文治三年(1187 年)に、源頼朝が海上交通安全と、祈願成就の守護神として、安房国の洲崎明神である祭神の天比理乃咩命(あめのひりのめのみこと)を勧請して、品川大明神と称し、今は社名を品川神社と改めた。

慶長5年(1600年)に徳川家康が関ヶ原へ出陣する前に、ここで戦勝祈願し、神前で大々神楽を奏で、戦勝後、家康が神輿と仮面を奉納した。天王祭の際には葵の紋の神輿が担がれている。

品川神社のなかに、明治2年(1869年)に富士山を信仰する富士講の人たちによって造られた都内最大の**富士塚**があります。現在はレインボーブリッジがやっと見える程度です。

来た道を400mほど引き返す。旧東海道を越えて山手通りに出ると直ぐに児童公園がある。かつては**品川の本陣宿があった場所**で、明治維新のときに京都から東京に移る明治天皇が宿泊したという事から「聖蹟」という名前にな

っているとのこと。公園の東側には、「御聖蹟」を示す石版や銅像が建ち並んでいます。

旧東海道の出入口には**八番石柱(品川宿本陣跡)**と**土山宿の松**があります。土山宿の松は東海道49番目の宿場、滋賀県甲賀郡土山町の寄贈。1997年に植樹したものです。

引き続き街道を230mほど南下すると海側に**品川宿交流館**(本宿お休み処)があります。休憩所の二階には昔の品川宿の巻き絵があり、江戸時代の品川宿の様子を確認した。

※品川宿は徒歩新宿(品川宿の入りロー法善寺)、北品川宿(法善寺ー目黒川)、南品川宿(目黒川ー海晏寺)に分かれています。品川宿は三宿の総称。各宿場に名主がいた。(3名)

品川宿交流館の60m先の山側にある「マスターズコート北品川」の角に御油(ごゆ)宿の街道松が植えられている。この松は東海道35番目の宿場、愛知県豊川市御油町伊藤武彦さんの提供、天然記念物の松の種子を6年かけて高さ2メートルほどに育てた松の若木。2009年6月に植樹したものです。

道を渡ると**品川橋**があり、説明ボードが橋の左側にあります。この橋は目黒川に掛けられており、境橋・行合橋・中の橋など別称があるようです。

目黒川沿いの道を75m川上側へ、そこに**荏原神社**あります。この神社は、和銅2年(709年)9月9日、奈良丹生川上神社より高麗神(龍神)を勧請し、創建されました。長元2年(1029年)に神明宮、宝治元年(1247年)に牛頭天王を勧請し、古くから品川の龍神さまとして親しまれ、貴船社、貴船大明神、品川大明神と呼ばれ、江戸時代には2石5斗(5石を品川神社と折半)のご朱印を受けていた。

赤い橋(鎮守橋)を渡り、品川橋方向へ100m引き返す、旧東海道を越えた橋の袂に**脇本陣百足屋跡**の説明板がある。脇本陣百足屋跡地は現在は城南信用金庫品川支店が建てられている。

城南信用金庫品川支店から150m南下すると山側に**街道松の広場**ある。この広場には**浜松宿の松**があり、この松は東海道29番目の宿場、浜松市の有賀慶吉氏から寄贈された樹齢80年の黒松。有賀氏から「**品川宿の松**」と命名され、1993年に植樹したものです。

街道松の広場から引き続き120m南下した信号機のある交差点を越えた山側にある内藤酒店横に十番石柱(南馬場)ある。海側の金子製菓実験社が人馬の継立業務・飛脚業務を担当した**問屋場の跡地**である。この辺りが漫画「浮浪(はぐれ)雲」の舞台です。

40mへ南に進むと南品川二丁目児童遊園あり、これが**南品川宿お休み処**です。ここに**三島宿の松**が植えられている。この松は東海道11番目の宿場三島市の寄贈。1993年に植樹されたものです。

更に120m進むと海側に城南小学校前のサンタクルス品川の北東角に一本の松がある。これが**袋井宿の松**です。この松は東海道53次の真ん中、27番目の宿場袋井宿より寄贈。2001年に植樹されたものです。

40m進むと山側に**十一番石柱(天妙国寺門前)**みられます。天妙国寺門前から30m進むと大正時代の建築の**松岡畳店**があります。ここの休日で店舗は開いていませんでした。

松岡畳店から南下240m進む、途中の都道421号交差点を渡った山側に**十三番石柱(青物横丁)**あり、青物横丁を更に進むとガーデンホーム南品川の建物がある。この建物の前に立場茶屋釜屋跡の説明ボードがあり、ガーデンホーム南品川の南角地に**保土ヶ谷宿の松**が植えられている。

青物横丁は江戸時代に農民がこの地に青物(当時は野菜や山菜のことを指した)を持ち寄って市場を開いたことに由来する。

立場茶屋は一般的に旅籠より安価であったため、繁盛したといわれ、殊に釜屋は本陣同様の門構えをし、連日幕府関係者が宿泊したという。明治元年(1868年)1月には、鳥羽伏見の戦いから関東に引き上げてきた土方歳三を始めとする新選組隊士も一時釜屋に投宿した。(立場とは人足の杖を立て懸ける処)

保土ヶ谷宿の松は東海道4番目の宿場・保土ヶ谷の寄贈。1999年に植樹された。

保土ヶ谷宿の松から15m先の山側に**品川寺**があります。この寺の呼び名は(ほんせんじ)と云い、真言宗醍醐派で、海照山普門院と号し、真言宗醍醐派の別格本山です。本尊は正観世音です。大同年間(806～10年)創立された品川区内で一番古いお寺です。国指定重要美術品の**大梵鐘**と都指定の重宝の**銅造地藏菩薩坐像**(江戸六地藏の一つ)があります。

品川寺の大梵鐘は、慶応3年(1867年)にパリ万国博覧会に出品されたが、日本に返される途中で行方不明となる。のちに、スイス・ジュネーヴのアリアナ博物館にあることがわかり、昭和5年(1930年)に返還された。地元では、「あてにならない鐘が帰ってきた」ということで、鐘と金をかけて、「あてにならない金が返ってくる」、「かねかえる」と縁起をかつぎ、多くの方が除夜の鐘をつきに訪れます。

品川寺の南60mの山側に**海雲寺**ある。この寺は曹洞宗寺院で、竜吟山瑞林院と号します。本尊は十一面観世音です。もと海晏寺の塔頭(たちゅう)でしたが、元禄3年に一寺となって現在に至っています。

※塔頭は、本来、禅寺で、祖師や大寺・名利の高僧の死後、その弟子が師の徳を慕って、塔(祖師や高僧の墓塔)の頭(ほとり)、または、その敷地内に建てた小院こと。

庭内には**千駄荒神**が祀られている。「品川の荒神さま」と親しまれる火と水の神、千駄荒神があり、3月と11月の27・28日には、千駄荒神祭の参詣者で賑わいます。九州鍋島家が島原の乱の際、戦勝を祈願して千駄荒神を祀ったものが、海雲寺に引き継がれたとのこと。

ここで、田代さんが早退して20名で散策を続ける。

今日の品川宿散策が終了し、旧東海道を離れて東京工科専門学校前バス停へ向かう。東京工科専門学校前バス停から大井町駅東口バス停へ都バスで移動、昼食休憩後に花岡さんと木頃さんが所用のために早退して18名となりました。18名で東急大井町駅から池上駅へ移動。

計画当初はバス移動を計画していたが、旧東海道の散策場所が多すぎて予定時間を大幅に遅れが生じて電車移動に急遽変更した。

池上駅から参道を使って600m歩むと総門に到着する。

池上本門寺は、日蓮宗で長栄山大国院本門寺と称します。弘安5年(1282年)、日蓮聖人身延山から常陸へ向かう途中に当地へ立ち寄り、創建しました。池上宗仲は69,384坪を寄進して現在の池上本門寺の礎を築きました。慶長年間には徳川家康から寺領100石をうけた他、加藤清正や紀伊徳川家等諸侯の祈願寺となっていました。日蓮宗の十四霊蹟寺院、七大本山の一つに数えられています。本尊は釈迦如来像です。

※池上宗仲(いけがみ むねなか、生没年未詳)は鎌倉時代の武士で、日蓮の有力檀越。官位は日蓮の書状によると右衛門大夫。大中臣氏を自称しているが、池上氏は藤原忠平又は藤原良相の子とされる池上忠方の末裔を称する家柄である。日蓮に深く帰依し、弟の池上宗長とともに池上兄弟と呼ばれた。

総門をくぐると池波正太郎の「鬼平犯科帳の本門寺暮雪」の舞台になった長い石段(此経難持坂)がある。石段を登りきると日朝堂、**日蓮聖人像**、鐘楼、長栄堂がある。更に進むと**仁王門**があり、門をくぐると左側に霊宝殿、右手の奥に**五重塔**みられる。

此経難持坂がキツイ参加者が出て裏の緩やかな坂道を使って大堂の裏に来てもらった。

正面に大堂、その左側に経蔵がある。大堂の裏側は駐車場になっており、道を渡ると客殿・寺務所、その奥に本殿、御廟所、松涛園などがある。時間的な制約もあり、駐車場から直接、**多宝塔**(日蓮聖人御茶毘所)に詣でる。

※日蓮聖人は、弘安5年(1282年)9月8日9年間棲みなれた身延山に別れを告げ、病氣療養のため常陸の湯に向かわれ、その途中、武蔵国池上(現在の東京都大田区池上)の郷主・池上宗仲公(鎌倉幕府の作事奉行)の館で亡くなりました。亡くなられた場所は現在、池上本門寺の末寺の池上大坊本行寺になっています。その場所は池上本門寺の隣です。

引き続き隣の**池上梅園**へ向かう。池上梅園は池上本門寺の西に位置し、丘陵斜面を利用した庭園です。同園の案内によると北側は戦前まで日本画家伊東深水氏の自宅兼アトリエ「月白山荘」でしたが戦災で焼失。戦後料亭経営者小倉氏が南側半分を拡張、別邸として使用していました。小倉氏没後、東京都に譲渡され、昭和53年(1978年)大田区に移管されました。大田区では、紅梅を中心に植林、整備拡張を進めてきました。その結果、現在面積9,880㎡、区花である梅は紅梅220本・白梅150本、その他ボタン、ツツジ等50種500本の樹木があります。15時30分に梅園前で本日の予定を無事に終了して解散した。

徒歩で池上駅に向かう組とバスでJR大森駅に向かう組に分かれる。バス組の内、参加希望者10名が本日の反省会を開催した。

本日のハイキングはDoor to Doorで19346歩で距離は5Km強でした。

(本日の参加者・アイウエオ順 敬称略)

岩崎正憲、岩田芳秀、植野郁夫、榎本哲夫、遠藤哲也、小澤敏宣、川上 昇、木頃勝紀、笹川君子、白岩仙一、住田勝治、田代 周、西部修三、野田 佑、花岡秀男、古屋榮三、牧田賢二、明星好光、六角 学、川股賢三、実川ゆうこ(ゲスト)の計21名



入口広場の案内看板を使っのコース説明(六角)



八つ山口手前の踏切で電車の通過待ち(六角)



一番石柱(東海道八ッ山口) (六角)



問答河岸の碑(川股)



三番石柱(歩行新宿と土蔵相模跡) (川股)



稲葉(因幡)屋跡地から路地で利田神社に向かう(六角)



手前が小さい公園から鯨塚の裏面が見えます。(六角)



利田(かただ)神社の鯨塚(川股)



御殿山下砲台の石垣と第二台場にあった灯台レプリカ(川股)



善福寺「こて絵」の寺としても有名(川股)



石柱 品川宿(江戸より二里・川崎宿へ二里半)(川股)



品川宿の松(川股)



下駄の丸屋(川股)



一心寺(川股)



五番石柱(虚空蔵尊横丁・本宿(川股))



養願寺(田代)



養願寺から北馬場への路地で品川神社へ(六角)



五番石柱(虚空蔵尊横丁・本宿)(川股)



虚空蔵尊横丁からレンガ壁越しに見える
真宗正徳寺の紅梅(六角)



レンガ壁 土台がイギリス積み・上部がフランス積み
田代さんが見つけてくれました。(田代)



第一京浜越しにみる品川神社(六角)
階段の左側の小高い所が富士塚です。



品川神社(川股)



品川神社の紅梅(六角)



品川の本陣宿跡地(川股)



八番石柱(品川宿本陣跡) (六角)



土山宿の松(六角)



品川宿交流館(本宿お休み処) (六角)



品川宿交流館(本宿お休み処)で小休止 (六角)



品川橋(六角)

後方の城南信用金庫が脇本陣百足屋跡脇本陣百足屋跡



品川橋の説明ボード(六角)



荅原神社(六角)



荅原神社の拝殿(六角)



赤い橋(鎮守橋)と御神木の寒緋桜(六角)



街道松の広場・浜松宿の松(六角)
「品川宿の松」と命名



十番石柱 南馬場(田代)



問屋場の跡地(六角)



南品川宿お休み処 三島宿の松(六角)



袋井宿の松(六角)



十一番石柱(天妙国寺門前)(六角)



松岡疊店 今日(は)休日(六角)



十三番石柱(青物横丁)(六角)



青物横丁にあった旧東海道の道路標識(六角)



保土ヶ谷宿の松(六角)



品川寺 の銅造地藏菩薩坐像(六角)



品川寺の山門(六角)



品川寺の大梵鐘 金帰るの鐘です。(六角)



海雲時(六角)



海雲寺の千駄荒神(六角)



海雲寺の鐘楼(六角)



池上本門寺の境内説明ボード(六角)



此経難持坂 急で長い階段(六角)



日蓮大聖人の像(六角)



池上本門寺の仁王門(六角)



重要文化財の五重塔(六角)



宝塔(六角)



池上梅園(六角)



池上梅園(六角)



反省会(六角)



第52回 ハイキング・クラブ例会

池上本門寺境内入口階段で

平成26年2月23日(日)

- 1 列左側から牧田賢二、明星好光、榎本哲夫、植野郁夫、花岡秀男の5名
 - 2列左側から白岩仙一、木頃勝紀、岩田芳秀、六角 学の4名
 - 3列左側から小澤敏宣、野田 佑、西部修三、笹川君子、実川ゆうこ(ゲスト)の5名
 - 4列左側から川股賢三、住田勝治、遠藤哲也の3名
 - 5列左側から古屋榮三、岩崎正憲、田代 周、川上 昇の4名
- 合計21名(敬称略)

ハイキングクラブの欠席者(敬称略)

青木 登、石川哲巳、宇田川修彦、芹川時雄、山田昌之、中島公一、西長義方、蓮田周男、川島省三の9名でした。

※この報告書は事前調査資料と下見資料に基づいて作成し、配布した52回ハイキングコースガイドに従って記載しています。スナップがあるものは太字にしています。

なお、私のデジタルカメラの電池が異常放電して途中でスナップ撮影が不能になり、六角さん、田代さんからスナップの提供いただきました。

残念ながら法禅寺、法禅寺の樹齢約400年のイチョウ、御油(ごゆ)宿の街道松、立場茶屋釜屋跡の説明ボード等の撮影がされていませんでした。